

群 教 セ	G11 - 01
	平27.257集
	特別活動

互いのよさを認め合い、協力し合って より良い集団を目指す学級活動(1)の工夫

— 『話し合いボード』を活用した話し合いを通して—

特別研修員 谷山 栄子

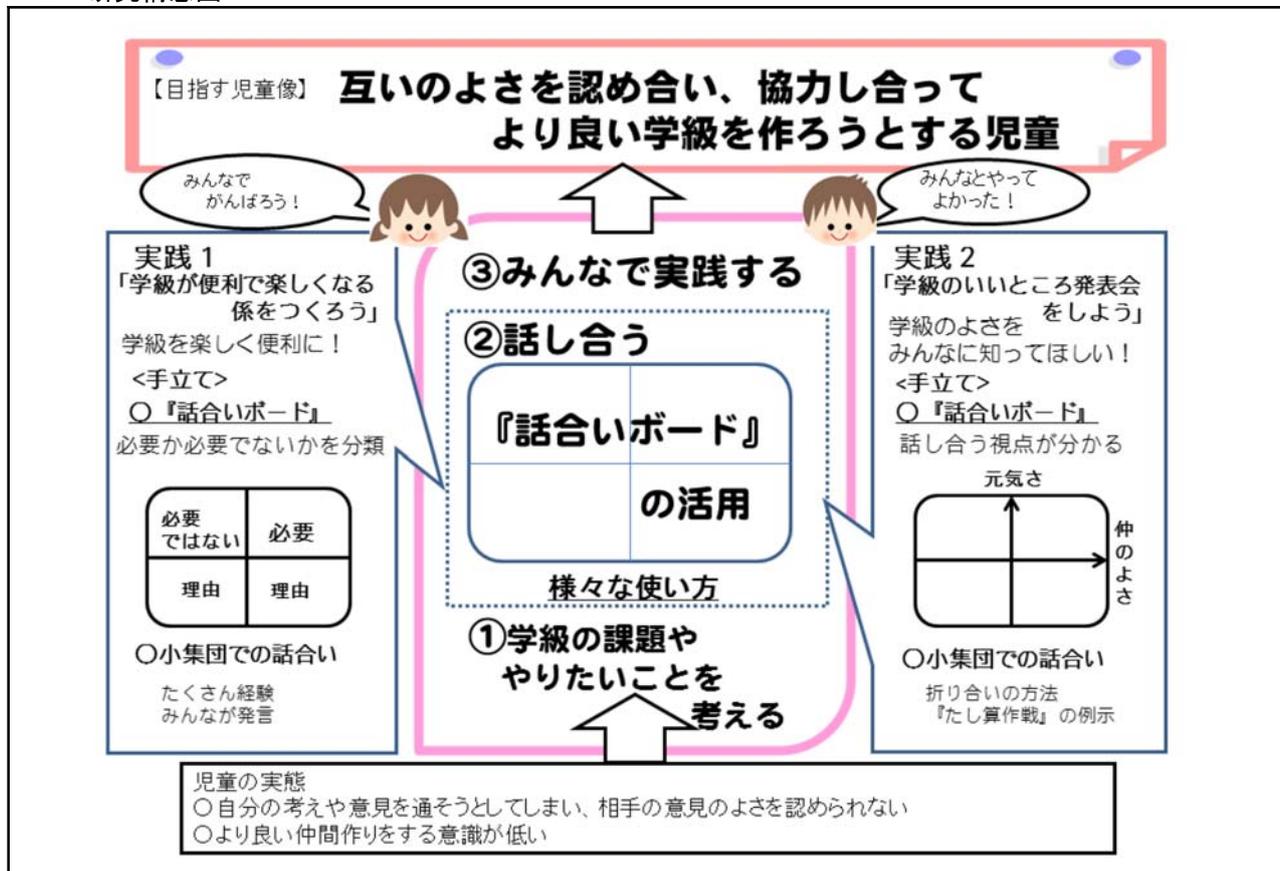
I 研究テーマ設定の理由

小学校学習指導要領解説特別活動編では、小学校3、4年生の指導のめやすとして「協力し合って楽しい学級生活をつくる」ことに重きを置いている。また、「はばたく群馬の指導プラン」では3つの豊かな心を示し、そのうちの「大切に作る心」で「学級の生活をよりよくするために、友達と協力し合うことができる」ことを求めている。

協力し合うためには、相手の考えを聞いて受け止める、互いの意見のよさを認めるといった態度が必要となる。これらは話し合いや協同的な活動等を経験することで育成されていくと考えるが、中学年の多くの児童にとってその経験は十分ではなく、話し合っても相手の考えのよさを認められずに自分の考えを通そうとする傾向が見られる。そこで、『話し合いボード』を活用し、意見を視覚化することで、互いの考えのよさを認め、「自分もみんなも良い」考えとなることを意識した話し合い活動を行う。これによって意見を比べ合い認め合う中で、集団にとってより良い結論を導けるようにする。さらに、集団決定したことを実行することで、共通の目的に向かってみんなで取り組むよさを感じ、より良い学級づくりをする意欲を持てるようになると考え、上記のように本研究テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

(1) 実践1 議題名 「学級が便利で楽しくなる係をつくろう」(第4学年・1学期)

実践1における手立て

- ①『話し合いボード』を活用し、学級に必要な係と必要ではない係を分類し、意見を比較できるようにした。
- ②小集団での話し合いを取り入れ、友達の意見を意識して考え、折り合いをつけてまとめていけるようにした。

『話し合いボード』とは、小さなホワイトボードを十字に区切り、児童が互いの意見を分類したり、比較したり、共通点を見いだしたりするために活用する物であり、議題や話し合う視点によって活用方法を変える。本実践では折り合いを付けて話し合う経験をより多く積めるよう、小集団(班)で話し合う場を取り入れ、ここで『話し合いボード』を活用した。実践1では、上段を「必要な係と必要ではない係」に分け、下段にそれぞれの理由を書いた。実践1のように出された意見を比較し、選択するような議題ではこの方法は有効であった。しかし、互いの意見のよさを生かして折り合いをつけてまとめるという効果までは見られず、相手の意見のマイナス面だけを指摘したり、賛成や反対だけのやりとりになってしまったりして話し合いが上手く進まなかった。そこで、実践2では、話し合う視点が分かるように『話し合いボード』を示し、更に折り合いを付けるための手立てとして『たし算作戦』を加えることにした。

(2) 実践2 議題名 「学級のいいところ発表会をしよう」(第4学年・第2学期)

実践2における手立て

- ①小集団で話し合う場面において、計画委員が考えた視点を示した『話し合いボード』を活用しながら発表会の内容を検討し、より良い考えを生み出せるようにした。
- ②『たし算作戦』を提示し、友達の意見を聞き、互いの意見を生かしながら集団としてのより良い考えに近付けられるようにした。

実践2では小集団(班)で意見を検討し、より良い考えに近付ける場面で『話し合いボード』を用いた。『話し合いボード』には計画委員が考えた視点が示され、意見が書かれたミニ短冊を動かしながらより良い意見にまとめていけるようにした。『たし算作戦』とは、友達の意見を聞き、互いの意見のよさを生かしながら集団としてのより良い考えに近付けられるような方法を示した物である。中心となる意見に付け足す方法や、優先順位を決めてどの意見も取り入れる方法など、複数の方法を例示し、互いの意見を生かしながらかつめていく手助けとした。児童は視点に沿って話し合いながら、集団としてのより良い考えを目指して、互いの考えのよさを生かしたり、新たな考えを生み出したりしていた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 『話し合いボード』を活用することで、児童の意見が可視化され、互いの意見を比べ合い、共通点や相違点、考えのよさに目を向けて活発に話し合うことができた。また、話し合う視点を示すことで、児童はその視点に沿って話し合いを進めることができた。
- 『たし算作戦』の提示により、自分の意見だけに固執せず、互いの意見のよさを生かしてより良い意見にまとめていこうとする意識を持つことができた。
- 「学級みんなで協力しながら取り組もう」、「学級みんなで良くなろう」という意識が表れた発言や行動が見られるようになった。どんなことでも安易に多数決で決めるのではなく、話し合っ解決しようとしたり、互いの意見を認めながら様々な活動や学習をしたりする姿が見られるようになった。

2 課題

- 『話し合いボード』を使う小集団での話し合いは、議論の視点が明確に示され、互いの意見も可視化されるので活発な話し合いがなされるが、全体での話し合いになると積極的な意見が少なくなってしまう。話し合う内容や場面に応じた活用方法を考えていく必要がある。
- 単純な合体意見でなく、議題に合った『たし算作戦』の効果的な使用方法を提示する必要がある。

<授業実践>

実践 1

1 議題名 「学級が便利で楽しくなる係をつくろう」(第4学年・1学期)

2 本議題及び本時について

4年生に進級し、一人一人が学級の仕事を分担する「一人一仕事」の当番活動が始まった。学級生活を送る上で必要な仕事の多くはこの当番活動で間に合っていたが、当番活動は「毎日活動できるもの」が原則のため、「体育の準備運動で号令をかける人がいない」など不都合が生じていた。多くの児童がこの不都合を解消するために「学級が便利で楽しくなる係」を作りたいことを希望し、議題箱にも多くの意見が寄せられた。学級をより良くするための係を作るという内容であるため、自分がやりたいという気持ちだけでなく、学級全体を考えて意見を出して話し合う意識や、より良い学級にしていこうという意識を持つための良い機会と考え、本議題を取り上げた。

3 授業の実際

本学級では4月から教師主導による話し合い活動や、帰りの会において班ごとに、一日の頑張りを紹介する活動を行ってきた。しかし、児童が主体となって学級全体で話し合う場面は殆どなかった。そこで、事前に学級会の持ち方や話し合いの仕方、計画委員とは何かについての学習を行った上で本実践を行った。まず計画委員と議題を決定し、役割分担や話し合いの流れを考えた。そして、学級会ノートを使って個人で意見を考えた後、小集団(班)で話し合っ意見を絞り、絞られた意見を本時で話し合う流れとした。本時では必要な係について話し合い、細かな人数配分や所属についての話し合いは朝の会や帰りの会を使って行うこととした。

(1) 事前の話し合い

事前の活動や話し合いは、朝の会や帰りの会で行った。計画委員が作成した学級会ノートを使い個人で考えた後、小集団で話し合っ意見を絞った。その中で「体育係」という意見が多数を占めた。そこで、計画委員で相談して本時の話し合いの前に体育係については意見多数ということで決定して良いかを学級全体に投げかけることにした。その結果、全員賛成で決定となった。残りの意見は学級会コーナーに掲示し、話し合いの前に意見を確認できるようにした。

事前に小集団で話し合っ絞られた意見				
・用意係	・あいさつ係	・声かけ係	・おたんじょう日係	・保健せいとん係
・音楽係	・はりだし係	・はりかえ係	・落とし物チェック係	

(2) 本時での話し合い

出し合う場面では、計画委員が事前に絞られた意見を紹介して確認するだけとし、比べ合う時間を十分に確保することにした。各班から出された意見の中で全班一致している案については確認の上決定とし、意見が分かれている案について小集団で『話し合いボード』を使って話し合うこととした(図1)。小集団での話し合いは、学級に必要な係と必要でない係という視点で理由も含めて話し合った。ミニ短冊を用い、『話し合いボード』の上段右に必要な係、上段左に必要でない係を貼って分類した。その理由については別の短冊に書き、それぞれの意見の下段に貼り付けた(図2)。

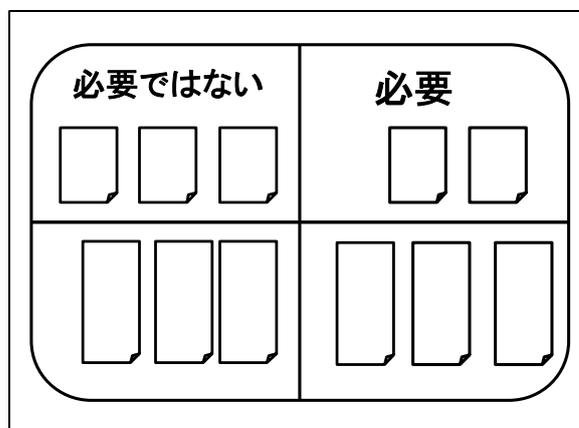


図1 『話し合いボード』

次に、小集団で話し合った結果を『話し合いボード』を使って全体の前で発表した。ここでは黒板を

『話し合いボード』と同じように十字で区切り、そこに短冊を貼って整理していった(図3)。最後に各班から出された意見をもとにその係を実際に作るかどうかを全体で話し合った。その結果、8つの係を作ることが決定された。



図2 『話し合いボード』を使って話し合う様子

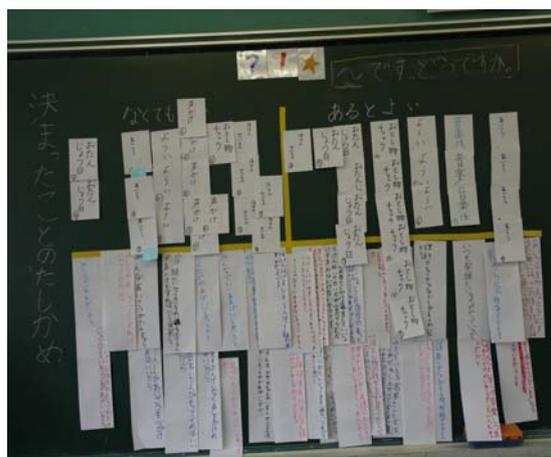


図3 黒板に貼られた意見

全体で話し合った際の児童の発言	
S 1 :	おたんじょう日係に賛成です。理由は、友達に祝ってもらってうれしい気持ちになるからです。
S 2 :	おたんじょう日係に反対です。すでにお誕生日が過ぎてしまった人もいるし、夏休みなど長い休みの間にお誕生日が来る人もいて、祝えない人もいるからです。
S 3 :	お誕生日が過ぎてしまった人は6月、7月のお誕生日の人と祝えばいいと思います。夏休み中の人は2学期になって9月のお誕生日の人と祝えばいいと思います。
S 4 :	お誕生日が過ぎてしまった人や夏休みや冬休みにお誕生日が来る人も祝ってもらえるなら、おたんじょう日係があってもいいと思います。

(3) 実践の様子

決定した係の人数割りと所属を決めた後、朝の会、帰りの会を使って係別会議を持った。係の仕事内容や役割分担、工夫等を話し合った。落とし物チェック係は早速落とし物箱を作った。また、活動が軌道に乗り始めると定期的な活動に加え工夫も凝らされるようになり、体育係企画のリレー大会やお手伝い係のお手伝い祭等が実施されるなど、自主的な活動を続けている。

4 考察

- 『話し合いボード』は、意見の可視化・操作化が図られるので、活発な意見交換に有効であった。中には「～さんの意見を聞いて、自分もそうだなと思いました。」という発言など、友達の意見を聞いて考え直す児童も見られるようになった。
- 『話し合いボード』は今回の使い方以外にも様々なパターンを考え、児童が折り合いを付けて話し合う意識を持てるような物にするため、学級活動だけでなく、教科指導等でも活用していく必要がある。
- 『話し合いボード』を使う際、児童が、「書く」「貼る」という作業に夢中になってしまった。話し合いに集中できるよう、作業を簡易化する必要がある。
- 小集団での話し合いには慣れてきたが学級全体で練り合うことが難しいので、全体でも練り合えるように話し合う集団の人数を段階的に広げていく必要がある。
- 班で話し合った意見を、黒板に貼ったが、一度に全ての意見について話し合ったため、黒板が意見で埋め尽くされてしまい、重視すべき理由が見づらくなってしまった。同じ理由や似た理由はまとめるなどして整理する必要がある。
- 児童は「折り合いを付ける」イメージを持ちにくいので、折り合いの付け方を示す必要がある。
- 相手の意見を意識して発言できるような話し方や聴き方も示していくとよい。

実践 2

1 議題名 「学級のいいところ発表会をしよう」 (第4学年・2学期)

2 本議題及び本時について

「学級を有名にしたい」「みんなで何か一つのことをしたい」「学級文化祭をしたい」という議題が寄せられた。運動会を成功させるための取組を自分たちで話し合い、協力して取り組んだことで、みんなで協力することのよさを児童自身が感じた。今度は学級で一つのことに向かって取り組み、その内容が自分たちのよさを示せるものであれば、更に自分たちの学級や一人一人のよさに目を向けていけるであろうと思ひ、提案者と計画委員で相談し、この議題を取り上げることとした。

3 授業の実際

「学級のいいところ」を示す発表会であるため、まずは、計画委員が自分たちの学級のよさについて話し合った。さらに、音楽や書写等で関わりのある先生たちにインタビューを行ったり、学級アンケートを取ったりして自分たち自身のよさを把握した。計画委員で話し合い、学校公開日の昼休みに行くこと、発表内容は二つで、それぞれ10分以内と決めた。その後、発表する内容や必要な係、誰を発表会に招待するか等、話し合わなくてはならないことを検討した。本時では、発表する内容に絞って話し合うこととした。

児童の考える学級のよさ (計画委員作成のアンケート結果より)			
・元気なところ	・協力するところ	・楽しいところ	・けんかやいじめがないところ
・あいさつができるところ		・明るいところ	・えがおが多いところ
・けじめのあるところ	・話の聞き方	・たくさん給食を食べるところ	

(1) 事前の話合い

個人の意見を集約した後に小集団で話し合い、意見を絞ることにした。ここでは計画委員で話し合った「10分以内」「みんなでできる」という物理的な視点二つを『話し合いボード』に示し、各班で意見を絞っていった。ここで各班で絞られた意見の多くに「合唱」が挙げられたため、実践1の時と同様に意見多数のため決定してよいかを学級全体に聞いて決定し、本時ではもう一つの発表内容を話し合うこととした。残った他の意見は理由とともに短冊に書いて掲示し、事前に全員が確認できるようにした。

事前に小集団でまとめて出された意見				
・げき	・組み立て	・ソーラン	・組み立て	・三十人長なわ
・三十人コラボとび	・組み立て+おどり			

計画委員が作成した学級のよさを尋ねたアンケートの結果、「元気がよい」、「協力ができる」、「仲がよい」という意見が多数見られた。そこで、本時で話し合う視点を学級の「元気のよさ」と「仲のよさ」が表れるものとし、どんな内容がふさわしいか、内容の質的部分に視点をあてて考えていくことにした。本時では、『話し合いボード』の十字を座標軸にして、縦軸に「元気のよさ」横軸に「仲のよさ」を示し、それぞれ10段階で考え、右上に集まったものを選んでいく方法を取った。さらに、出された意見を計画委員がミニ短冊に書き写し、『話し合いボード』上で操作できるよう、セットで用意した(図4)。

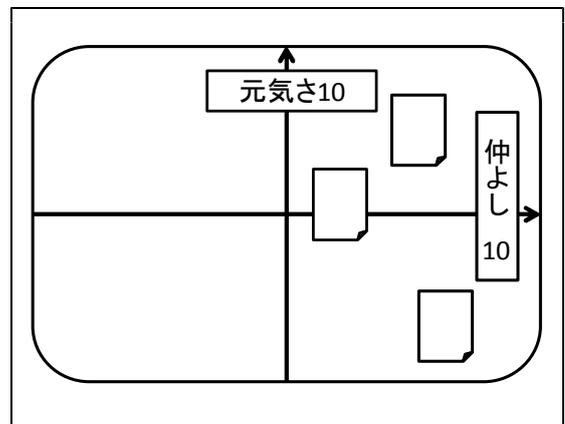


図4 視点を示した『話し合いボード』とミニ短冊

(2) 本時での話し合い

本時では、話し合いのめあてに加え「元気のよさ」、「仲のよさ」という話し合うための視点を示した。

出し合う場面では、実践①と同様に出された意見を計画委員が確認するだけの形にして、比べ合う場面に時間をかけられるようにした。比べ合う場面では、まず小集団で『話し合いボード』とミニ短冊を使って話し合いを行った。児童は『話し合いボード』の上でミニ短冊を操作しながら意見を述べ合い、比べ合いながら自分たちの意見をまとめていった。また、「たし算作戦」を使いながら、互いの意見を生かせるような意見にまとめていく姿が見られた。

小集団での話し合いの結果、出された意見は「劇」、「三十人コラボとび」、「ソーラン劇」、「組み立て+おどり」の4つに絞られた。次に、これら4つの意見を全体で話し合った。この比べ合う場面では、賛成意見にマグネットを貼って、意見がどのように流れてい

「自分もみんなも良い」
意見に近づくために
『たし算作戦』
○トッピング法
○ドッキング法
○全部のせ法
○回転寿司法
○新製品法

図5 たし算作戦

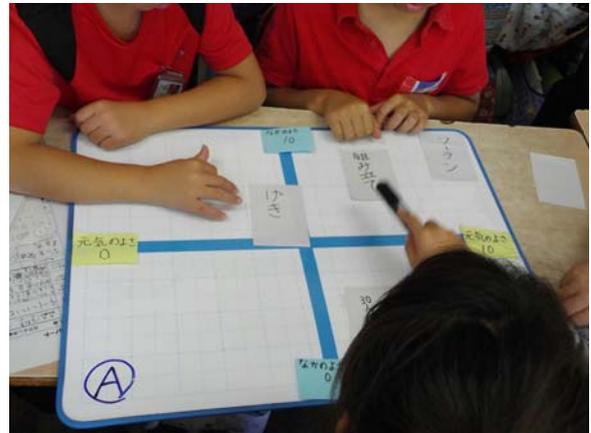


図6 『話し合いボード』を使って話し合う様子

るかを把握できるようにした。児童は互いの意見を聞いて、それに対して賛成や反対といった自分の意見と理由を述べていた。ここで児童の多くが「ソーラン劇」の意見に傾いていく中、発表時間を理由に反対する意見が出た。しかし、「ソーラン劇」を実現できるように以下のように折り合いを付けるような意見を述べる児童も見られた。

意見が対立した場面で出された児童の意見
S 1 : 「ソーラン劇」がいいと思います。これならみんなの元気のよさも、仲のよさも出せると思うからです。
S 2 : 「ソーラン劇」に賛成です。ソーラン節は運動会でたくさん練習したのでいいと思います。
S 3 : 「ソーラン劇」に反対です。なぜなら、10分という時間に入りきらないと思うからです。
S 4 : <u>時間が足りないのなら、10分で収まる内容にすればいいと思います。(折り合いを付ける意見)</u>

こうした話し合いが続く中で、「10分で収まる方法を取るのであればいい」と反対を述べていた児童も折り合いをつけ、「ソーラン劇」に決定された。

4 考察

- 『話し合いボード』によって、児童は出された意見に対して自分の考えを述べることができた。また、発言が苦手な児童も発言しやすくなり、小集団での話し合いが活発に進められた。さらに、ミニ短冊を使って操作しながら話し合うことで、自分たちの考えがどの方向に進んでいるかを把握できた。
- 『話し合いボード』を使うことで、話し合う視点が明確になり、話し合いがスムーズに進められた。意見が分かれたときも自分の考えを通そうとするのではなく、示された視点や条件に戻って考え、話し合うことができた。
- 『たし算作戦』を示すことで、児童は自分の主張ばかりを通すだけでなく互いの意見を生かして考えをまとめよう意識していた。小集団だけではなく、全体での話し合いでも生かされていた。
- 議題について事前に調査したり話し合う視点を考えたりして『話し合いボード』を作成するなど、計画委員が自主的に活動し計画立てられたため、的を絞った話し合いを時間内でできるようになった。
- 『話し合いボード』に示す視点は計画委員を中心に作ったが、より明確にするために、教師の思いを伝え、話し合いのめあてを踏まえたものにする必要があった。また、話し合いの視点を確認する場面も必要であった。